信仰を守る

乙女峠のミサ＝司祭40人、信徒1000人以上が集まった

五月三日は憲法記念日。この日は島根県津和野町で一九五四年から毎年、乙女峠祭りが開かれている。

明治の初め、全国でクリスチャンであるがゆえにたくさんの人が殉教した。

〈隠れキリシタン〉

秀吉のキリスト教禁止令は明治六年まで続くが、一人の司祭もいないのに、キリスト教信仰は長崎で二百五十年間、隠れキリシタンによって守り続けられた。

江戸末期、鎖国政策が改められ、長崎などに外国人のための教会が建てられた。

一八六五年三月十七日は隠れキリシタン発見の日。この日、大浦天主堂のプチジャン神父のもとに「私らは皆あなた様と同じ心を持っています」「サンタ・マリアのご像はどこ？」と名乗り出た。

目を閉じてこの情景を想像するたびに胸が熱くなる。ドラマのような本当の話なのだ。

しかし、キリスト教禁止令は続いており、この事件を契機にキリシタン迫害事件が起こる。約三千四百人が捕らえられ、全国二十一の藩に預けられた。

津和野にも百五十三人が流刑され、信仰を捨てるよう過酷な拷問が加えられ、三十六人が殉教した。この中に子どもが多いことに驚かされる。

〈今秋、列福式〉

豊臣秀吉の時代からのたくさんの殉教者のうち、百八十八人が今年秋、長崎で列福されるが、残念ながら乙女峠の殉教者はこの中にいない。山口県関係で列福されるのは一六〇五年に殉教した萩の熊谷豊前守と山口のダミアン伝道士の二人だけである。

さて、明治六年、外国からの圧力などでやっとキリスト教禁止令が廃止された。

信仰を持つ人は各地に流刑されたが、津和野の乙女峠が有名なのは優れたリーダー高木仙右衛門、守山甚三郎の「覚書」に史実が記録されていたことと、永井隆著「乙女峠」によるところが大きい。

高木仙右衛門らが、長崎で最初に逮捕された時、拷問を恐れて仙右衛門以外は全員「改心」、信仰を捨てると言った。ところが仙右衛門が頑として応ぜず、信仰を守り続けた。

この姿を見た改心者たちは、自分の行動を恥じ、改めて奉行所に「改心もどし」を申し出た。仙右衛門がもし棄教していたら歴史は変わっていただろう。

この「転び」をテーマにした遠藤周作の「沈黙」は秀吉時代を背景に書かれたものだが、拷問のむごさに変わりはない。なぜ命を捨ててまで信仰を守ったのか。

神はなぜ沈黙を守られたのか……。

五月三日には山の中腹にある殉教地、乙女峠まで、祈りの行列が続いた。

津和野教会の木村神父

帰化して日本の土になるという津和野教会の木村神父は八十二歳。自炊生活、腰は曲がっても乙女峠を守る。

殉教者や木村神父のような存在が神を実感させる。

数年前、行列の先唱の録音を頼まれ、今年もそのテープの音が津和野の街に流れた。

自分の声を聴きながら「神を第一に生きた殉教者」の生き方を自分に問い掛けた一日であった。

（元山口放送取締役ラジオ局長）